

ヴヴェージェンスキー・サークルとゲルツェン

渡 辺 雅 司

はじめに

19世紀60年代は、貴族に代って平民出身のいわゆる雑階級インテリゲンチアが、知的、革命的運動の前面に登場した歴史的転換期とされている。ここに至って古い世代(40年代人)と新しい世代(60年代人)との対立、断絶が顕在化する。そしてこの対立が、古い世代の最良の思想家にして亡命の革命家であるゲルツェンにも無縁でなかったことはこれまでの研究が示すとおりである。だが雑階級は60年代にはじめて出現したわけではない。40年代の代表的批評家ベリンスキーは典型的雑階級人だった。とすれば60年代の対立の根はそれに先立つ時代にすでにあったのではないか？ ゲルツェンは若き世代との和解の書『1831—63年』で「1848年とクリミア戦争に狭まれた暗黒の時代は、われわれにとって大きな意義を持つ。だがその意義については然るべき注意が払われてこなかった⁽¹⁾」と書く。この時彼は何を念頭においていたのか？ この問いに一つの解答を与えてくれるのが、これまで忘れられてきたヴヴェージェンスキー・サークル別名「水曜会」⁽²⁾である。このサークルについては、チュルヌィシエフスキーとの関係で若干の論文があるが、本稿ではゲルツェンとの関係に焦点を合せて論をすすめてみたい。⁽³⁾

〔註〕

- (1) A. И. Герцен Собр. соч. в 30-и томах. том. X VII стр. 101 以下ゲルツェンの引用は引用符後に次のように略記(X VII, 101)
- (2) このサークルが時代、構成員、その階級構成からみて非常に重要であるにもかかわらず、同じ時代のペトラシエフスキー・サークルに較べて殆んど研究がなされていないのは、資料不足がその主な理由であろう。
- (3) チュルヌィシエフスキーとの関係での論文、
 1. E. A. Ляцкий Н. Г. Чернышевский и И. И. Введенский, из Биографических очерков по неизданным материалам «Современный мир» 1910, No. 6

2. В. Е. Чешихин-Ветринский, Н. Г. Чернышевский, «Колос», Петроград, 1923
3. А. П. Медведев, Н. Г. Чернышевский в кружке И. И. Введенского. «Н. Г. Чернышевский, статьи, исследования и материалы» под ред. Е. И. Покусаева, 1958, Саратов.

1, 2 は未見であるが、ともに伝記的なもので、そこに扱われた資料は、殆んど3に吸収されていると思われる。なおメドヴェージェフの論文はこのサークルにおけるペリンスキーの影響とチュルヌィシェフスキーの思想的転換を、多くの資料に基づいて立証しようとした点で、注目すべきものであるが、幾分強引すぎる嫌がないでもない。

4. Ф. Кузнецов, Публицисты 1860-х годов, М., 1968 これはヴラゴスヴェートロフとの関係で扱ったものであり、新しい資料は用いられていない。

なおゲルツェンと「水曜会」の関係で扱った論文は著者の知るかぎりソビエトにもない。これは一つには、ゲルツェンが後の著作の中で国内の人間に難が及ぶことをおそれ、彼らとの非合法の接触に言及しなかったからであろう。

第一章 ヴヴェジェンスキー・サークルの構成とその特色

ヴヴェジェンスキー・サークルの成立がいつかははっきりしない。「40年代の後半に形成された⁽¹⁾」という一会員の回想があるのみである。おそらく48年前後のことであろう。というのは、48年にヨーロッパに革命の嵐を巻き起すにいたる各国の政治的覚醒と、かって憲兵長官ペンケンドルフをして、農奴制は国家の足下に横たわる火薬庫と言わしめた農民一擲のそれまでにない頻発は、ロシアにおける政治的変革の接近を予想させ、多くのサークルがその頃生まれたからである。そしてこの傾向は、48年二月革命以後の反動化の下でも弱まるどころか、逆に強まったのである。ヨーロッパの革命に恐怖したニコライは、それまで進めてきた農奴解放の計画をすべて反故にし、検閲を強化（これによって作家のツルゲーネフ、シチェドリン、サマーリン等が流刑にあう）し、これを境にペリンスキーによってそれまで発展させられたジャーナリズムも沈滞する。また大学の自由な空気を革命の温床とみたニコライは、哲学、憲法の講座を廃止するとともに、進歩的教授や学生には厳重な監視をつけた。⁽³⁾ こうした状況の下で体制に批判的な知識人たちは、公の場で失われた自由な言論を、私的な集まり＝サークルで取戻そうとした。40年代末に相当数のサークルがあったことは、ペトラシェフスキー事件の資料が立証している。⁽⁴⁾ 水曜会もそうしたサークルの

一つであり、それは政府の弾圧を受けることもなく、50年代半ば近くまで存在している。

サークルの設立者であり、自宅を提供したヴヴェージェンスキー (1819—55) はサラトフ神学校卒業後、モスクワの神学アカデミーに進み、同時にモスクワ大学の自由聴講生となり、後にペテルブルク大学哲学科に移籍した典型的の雑階級人である。彼は首都の貴族幼年学校と砲兵学校で文学を講ずる一方、英文学 (特にディッケンズとサッカー) の翻訳者としても知られている。進歩的教師と目されていた彼の家には水曜日毎 (50年9月以降は金曜日) に、ヴヴェージェンスキーと個人的つながりのある自由主義的な教師、文学者、学生が、10~20名 (うち3,4名は女性) が集まり、文学に関する新しい情報の交換、ブルードン、オーエン、ルイ・ブラン、フーリエなど西欧の社会主義文献の研究、討論がなされ、時にはゲルツェンやベリンスキーの非合法文書の朗読が行われた。また49年のペトラシェフキー事件後の1年間は、サークル内の議論が急進化し、革命、無神論の問題が度々俎上にのぼり、皇帝暗殺を口に出すものまでいた。一方若手の文学者、教師の育成を重要視していたヴヴェージェンスキーは、「水曜会」を検閲を通らない作家の作品発表の場として提供したり、教職をめざす若者には、試験的に講義をさせ、メンバーによる合評と指導がなされていた。そしてこうした自由な知的雰囲気は当時としては珍らしく、メンバーの1人は後にこう回想している。「それは当時ペテルブルクで生きた言葉と自由な思想を耳にできる唯一の場所であった」と。

ここでサークルの主だったメンバーを紹介しておこう。まずヴヴェージェンスキーと同年代の人間として、ニコライ孤児院の教師チュミコフ、同じくチスチャコフ、『イーゴリ軍記』を詩に翻訳したことで知られるミナーエフ、また少し若い世代では、ヴヴェージェンスキーのサラトフ神学校の後輩で、後に60年代の代表的雑誌『ロシアの言葉』の編集長としてピーサレフ、ザイツェフ、トカチョーフなどの《恐るべき子供》を育てたヴラゴスヴェートロフ、それに注目すべきことには60年代革命運動の最大の理論家チェルヌィシェフスキーが名を連ねている。これらのメンバーをみてまず気がつくのは、その殆んど全員が雑

階級だということである。この点でペトラシエフスキー会その他のサークルと大きく異なる。しかも会員の大多数が、軍人とか官吏ではなく、教師、それも大学ではなく中等教育機関の文学担当の教師だったということである。

これにはヴヴェジェンスキーが、文学教師であり、彼の交友関係を通じて殆んどどのメンバーが集まったが故に、自ずと文学を愛好する教師が大半を占めたという理由もある。しかしそれだけにとどまらず、この教師という職業の共通性が、このサークルに独自の実践活動を与えることになるのであるが、その意義については後述にゆだねよう。

次にこのサークルの特性として、ペリンスキーへの思想的、人間的傾倒があげられる。これには同じ平民出身という近しさもさることながら、中心的メンバーが個人的にかつてペリンスキーと接触を持っていたという事実も見逃せないだろう。ヴヴェジェンスキーが、『同時代人』誌を通じてペリンスキーと親交のあったことは注5で述べたが、それに先だつ学生時代に彼は当時一面識ももたぬペリンスキーに赤貧の中で金銭的援助を求めていた事実が、ソビエト時代になって明かになった。1840年3月2日付ポゴージンへの手紙でヴヴェジェンスキーは、この件を語る。「私のような^{ペルソナ}人間は誰れを尋ねてみても、善良な人々は皆私の無謀と軽々しさにただ驚きあきれるだけで、私の運命を幾分でも軽くしてくれませんでした。ただ一人、とても貧しくつい最近まで私のような境遇にあった人がみつき、私になしうるかぎりの真心こもった同情を寄せてくれました。餓死もせず五日も生きながらえ、貴方にお便りできるのはまさにその人のお蔭なのです」(JH. T. 56, стр 138)と。またチスチャコフは、モスクワ大学時代に、ペリンスキーとともに文学サークル《11号室》を組織した間柄である。更にヴヴェジェンスキーとチュミコフが大学時代に親交を結ぶきっかけとなったのも両者に共通していたペリンスキーの思想への熱中であった。チュミコフは書いている。「ヴヴェジェンスキー・サークルにおける思想的営為を規定していたのは、ペリンスキーの傾向に貫ぬかれた当時のすべての知的青年が、多かれ少なかれ染っていたあの野党的気分だった」と。⁽¹³⁾

ところで厳しい検閲制度の下で、革命的思想を説こうとする者は、さまざま

な抜け道を案出する。ロシアの評論に伝統的ないわゆるイソップ的表現、外国の歴史に名を借りた叙述等々枚挙にいとまがない。そして読者はまさに行間に真意を読みとる術を心得ていた。しかし時には、著者の軽率な言葉あるいは読者の深読み、早合点が思想の正しい伝達を妨げることが全くなかったとはいえないだろう。ましてや読者が片田舎から出て来たばかりの学生であれば尚更だろう。ここで筆者が念頭においているのは他でもないチェルヌィシェフスキーのことである。彼は49年12月に「水曜会」に参加する。ペテルブルク大学四年の時だ。⁽¹⁵⁾チェルヌィシェフスキーの思想的発展のプロセスは、ソビエトの一部の研究者がいうほど単純ではない。⁽¹⁶⁾大学時代の彼は、ハヌィコフやミハイロフとロシアの革命を論じ、フーリエ、ルイ・ブランなどの社会主義文献をかなり読んでいたが、世界観の根本となるべき哲学の分野では、根強い宗教心ゆえに唯物論的一元論には、到達できないでいた。50年の1月になっても「理論的にはむしろ宗教を信じない傾きがあるが、実際にはそれに関する今までの考えと訣別する不屈さと勇気が私には足りない」(I, 358)と書き、チェルヌィシェフスキーは、勤行をやっている教会の前を素通りできず、礼拝してさえいるのである。(I, 379)そして彼が神の死を自己に宣言するには、50年の8月まで待たねばならない。8月19日にチェルヌィシェフスキーは書く。「われわれの間の最良の人々がかくも不幸である時に、私は神の存在を信じたくない」(I, 389)かくてその一月後には、勤行中の教会を素通りしたことを日記にわざわざ記している。この宗教からの訣別の言葉を読む時、生身の人間の幸福の名において神を否定したベリンスキーの精神の軌跡をみる思いがする。ベリンスキーの宗教に関する発言は、その殆どがサークルあるいは友人への書簡の中でなされたのであり、雑誌の一般読者には、必ずしも伝わっていたとはいえないだろう。⁽¹⁷⁾したがってチェルヌィシェフスキーが、比較的短時日のうちに上のような結論に達した裏には、サークル内でベリンスキーを直接に知る先輩たちから彼の思想の実相を伝えられたということが考えられる。チェルヌィシェフスキーの参加した時期が、上で述べたようにサークルでの議論が最も沸騰した時期に重なることは、このことをある程度物語っているといえよう。恐らくその中で

ベリンスキーの『ゴゴリへの手紙』の朗読もなされたと予想される。以上でヴヴェジェンスキー・サークルの人的構成とその特色を、主にベリンスキーとの関連で概観してきたわけだが、最後に述べた『手紙』を媒体として、このサークルは国外のゲルツェンとも接点を持つことになる。

- (1) А. Милуков, Иринарх Иванович Введенский (из моих воспоминаний), «Исторический вестник», 1888, No. 9, стр. 579-80; А. П. Медведев, Указ. статья стр 49
- (2) Сб. «Крестьянское движение 1827—1869 гг.» вып. I, М. 1931. стр. 31, また1842年4月2日の勅令以後の農奴解放をめぐる動きについては、ゲルツェン『ロシアにおける革命思想の発達』金子幸彦訳、岩波文庫、179—183参照。
- (3) История СССР, Т. VI, 1967, стр. 312—14.
- (4) 予審委員会の調査は、ペトラシエフスキー会の分派であるカシキン、ドゥロフ両サークルの他にもいくつかのサークルを数えあげている。「Дело Петрашевцев» М—Л. 1937, т. I. стр. XX. また当事件で嫌疑を受けた者は千名以上にのぼった。А. С. Нифонтов, Россия в 1848 году, М, 1949, стр. 164.
- (5) 47年の『同時代人』誌の付録に載った彼の翻訳になるディッケンズの『ドンピ父子』は、ベリンスキーに注目され、ベリンスキーはそれまでのディッケンズ観を改める。(47年12月1—10日付アンネンコフ, 12月2—6日付ボトキンへの手紙)
- (6) チェルヌィシエフスキーの日記によると、50年9月15日から、サークルの集まりが金曜日になっている。(Н. Г. Чернышевский, Полн. собр. соч. т. I. стр. 395.
- (7) Н. Г. Чернышевский, Там же. стр. 395.
- (8) А. П. Милуков, Литературные встречи и знакомства, СПб. 1890. А. П. Медведев, Указ. статья. стр. 61 またサークルの討論内容はチェルヌィシエフスキーの日記からもある程度伺える。
- (9) チェルヌィシエフスキーは、サークルでのロシアの革命の議論に参加できたことを感謝している(50年5月10日の日記 I, 371) なお同じ日記によれば皇帝暗殺を口にしたのはミナーエフ (I. 395)
- (10) 1850年12月23日付チェルヌィシエフスキーからミハイロフへの手紙参照 (XIV, 204—216)
- (11) А. Чумиков, За И. И. Введенского, «Русский», 1868, No. 129 А. П. Медведев, Указ. статья. стр. 54
- (12) Чумиков (1819—1902) は、ゲルツェンとの関係で重要となるのでその経歴を述べておこう。商人の息子でベテルブルク大卒。大学時代に後のペトラシエフスキー会員プレシチューエフ、マイコフ兄弟、ミリュコーフと親交。41年に国外へ出、西欧各地を転々、ローマでオガリョフ、パリでアンネンコフと知り合う。帰国後考えるところあって孤児院の教師に。50年代末に彼の主宰した雑誌 «Журнал для воспитания» には、ドブロリューボフ、ラブロフも参加。Литературное Наследство (以下 ЛН と略) Т. 62, стр. 710—712 による。

- (13) A. Чумиков, Петербургский университет полвека назад, «Русский архив» 1889, No. 9, стр. 134, ло ЛН. Т. 62 стр. 710
- (14) 「水曜会」参加の時期を大学二年の時とする説があるが、事実誤認。Чешихин-Ветринский, Указ. статья. ヴヴェジェンスキーの神学校の15年後輩にあたるチェルヌイシェフスキーは、48年11月、ヴヴェジェンスキーの名の日の祝に訪問を決意するが、ズボンの仕立てが間に合わず、一年延ばしている。このエピソードは彼の律義な性格を表しているといえよう。(I, 181)
- (15) バスカーコフは、チェルヌイシェフスキーがすでに1845—46年段階でベリンスキー、ゲルツェンの影響で唯物論の立場に移行したとしている。В. Г. Баскаков, «Мировоззрение Н. Г. Чернышевского» стр. 330.
- (16) メドヴェージェフは、ベリンスキーの雑誌論文の多くが無署名であったことから、チェルヌイシェフスキーがベリンスキーに学びながら、自らの師がベリンスキーであることを知らなかった、という興味深い事実を指摘している。こういうことは、検閲下の歴史を考える時忘れてはならないだろう。Указ. статья.

第二章 ゲルツェンへの接近

51年7月22日、休暇でパリにあった「水曜会」の中心メンバー、チュミコフは当時ニースにいたゲルツェンに匿名の手紙を書く。この手紙がパリ警察長官カルリエの眼にとまらず無事ゲルツェンに届いたことが発端となつて、両者の間にはこれまで確認されただけで六通(チュミコフ四通、ゲルツェン二通)の書簡が交される。これらの書簡は、その時期、内容、発信者の社会的背景という点できわめて重大な意味を持つにもかかわらず、これまで十分に光を当てられてこなかった。そこで出来るかぎり資料を紹介しながら、当時のゲルツェンの置かれた立場と国内の新しい世代の運動の関係を分析したい。

7月22日付のチュミコフの手紙は残っていない。しかしその大体の内容はその後の往復書簡によって知ることができる。それによるとチュミコフはゲルツェンの国外での文書活動に熱烈な支持を表明し、ロシアから極秘で持出した資料(特にベリンスキーの『ゴゴリへの手紙』、ペトラシェフスキー事件に関する情報および「自由主義者」のリスト、これらがノートにしたためてあったらしい)を西欧の出版物に発表すべくゲルツェンに提供する旨伝えたようだ。

ゲルツェンにとってこの匿名の手紙は嬉しい驚きだった。即刻返事を書きその喜びを表現する。「7月22日付のあなたの手紙拝受、とり急ぎ心から感謝

の意を述べたいと思います。私にはロシア語で共感の言葉を聞くのは実に珍しいことなのです。とはいえ自分の著作に対するいくばくかの共感を疑ったことはありませんが、何故ならそれらの著作の源泉はひとえにロシアと未来の民衆への愛だからなのです。この数年ほど私がいかにロシア人であるかをはっきりと感じたことはかつてありません。

あなたの申し出に感謝し、喜んでそれをお受けいたします」(XXIV, 197, 傍点—原文イタリック)

ゲルツェンの喜びが殊更大きなものであったことは、当時彼がおかれていた状況を考えれば容易に理解できる。すでに47年に『マリニ通からの手紙』でブルジョアジーを批判していたゲルツェンにとって二月革命の偽瞞性と六月バリケード闘争の凄惨な弾圧は、ブルジョア社会の滅亡への確信をより強めたにすぎなかった。⁽⁷⁾ とはいえモスクワでのスラヴ派との論争において西欧派の論客としてあったゲルツェンにしてみれば、それは辛く悲しいことでもあった。⁽⁸⁾ ロシアから遠く離れた彼岸、西欧での憂愁と苦悶の中でゲルツェンの眼は次第に祖国へと向い、そこに西欧文明の原理とは無縁な、であるがゆえに大きな未来をもったロシアの民衆を見い出していた。

こうしたゲルツェンの「思想的転換」は、モスクワ時代の友人グラノフスキー、ポトキン、アンネンコフらには、スラヴ主義への傾斜と受けとられた。チュミコフの手紙の届く二カ月ほど前にグラノフスキーはゲルツェンにあてて次のように書いている。「私は君の歴史観、人間観には和解できない。……これまで君の書いてきたものは、限りなく聡明ではあるが、どことなく疲労感がにじみ出ており、諸事件の生々とした動きから切離されている。君は孤立しているのだ。……君は君の思想を理解し、それに侮辱を感じないでいられる少数の人間のためにのみ書いているのだ」(ЛН. Т. 62, стр. 99)

確かにゲルツェンは疲れていた。「家庭の悲劇」もさることながら、異邦人として西欧の卑俗な現実と和して行くことは耐え難かった。しかしグラノフスキーがすすめるように自由な言論の保障されないロシアにあって己れの文学的才能を伸ばす道を選ぶことは、ゲルツェンにとってかえって安易な道だと思

われた。ゲルツェンは自由な言論、ロシアの未来のために、あえて祖国の土(почва)との隔絶という負の要因を切りすてたのである。確かにゲルツェンは孤立していた。ロシアの自由主義者たちとの訣別によって、国内の運動との最後の絆が断ち切られるのを意識したこともあったろう。63年にシチュープキンへの手紙(9月10日)で当時を懐古して書く、「1850年から1855年間の恐しい歲月、人混みの砂漠でのこの5年間の喜びなき試練については、私は何遍となく語った。見ず知らずの人間の群の中で私は全く孤りぼっちだった……この時期には外国へ出るロシア人は最も少なく、しかも彼らは何よりも私を恐れていた」(レムケ版, т. 16, 505) 新しい力の抬頭を予想させるかに見えたペトラシェフスキー会の運動も余りに早く潰滅させられた。もはや自分の声に耳を傾ける者はロシアにいないかも知れない。そう思っている矢先にチュミコフの手紙が舞い込んだのである。

確かな住所も知らず「万が一を期待して」ゲルツェンに手紙を出したチュミコフは、「この世で何よりも尊敬する人間」からの返事にいたく感激し、8月5日に第二のかなり長文の手紙を書く。これによってチュミコフがヴヴェジエンスキー・サークルを代表して革命後のパリの状況を視察に来ていたことが判る。⁽⁹⁾チュミコフは書いている。「何と惨めなフランスの情況よ! 何たる知らせをもって私は友人たちの元へ戻るのか! 彼らは新聞が信じられず自由がどうなっているのかを、自由の死刑執行の現場で見てくるよう私に託したのです。彼らにあなたが『向う岸から』で言われているのと同じことですが、ヨーロッパは腐敗したということ、すなわちスラヴ派とブラチョークによってのべつ繰り返されている言葉を語ったなら、彼らは私が発狂したと思うでしょう」(ЛН. т. 62, стр. 718)

この文脈からすると、チュミコフの友人たちは、フランスの自由に期待し、ロシアの近代化を求めるいわゆる西欧派の人たちであろう。であればこそ、『向う岸から』における西欧へのゲルツェンの深い懷疑は、フランスからの新聞報道ともどもサークル内で大きな論議を呼んだことだろう。自分の眼で革命後のフランスの状況を目撃したチュミコフは、少なくとも西欧の現状認識とい

う点では、ゲルツェンと同じ結論に達したと思われる。その上でチュミコフはゲルツェンに教を乞う。「われわれは皆（リストによって社会のすべての階層にわたって自由主義がいることが分るでしょう）いたく意気阻喪していません。後戻りしないためには何をなすべきか、いかにあるべきか助言して下さい。あなたの言葉はわれわれにとって法であり、あなたはわれわれの予言者なのです」「あなたは権威であり（ところでわれわれは、あなたの予想以上に多数なのです）、われわれは指導者を欠いた畜群なのです」（JH. T. 62, стр. 718）等々。

これらの言葉は、ベリンスキー、ペトラシェフスキー会なき後、進むべき方向を見失った国内の革命的青年たちが、唯一人残された偉大な革命的亡命者ゲルツェンに最後の望みを託しているかに思わせる。だが続く二通の手紙の文体とこれらの馬鹿にへりくだった調子とを較べる時、そこにかなり大きな変化があるのに気づく。そしてそれは偶然ではない。これらの言葉の裏には、チュミコフの側からするある種の駈引が働いていたのである。だがそのことは次章に譲って、ゲルツェンにそう思われたようにチュミコフの言葉を文字通り受け取り、両者の間に見解の一致がみられたとして論を続けよう。

チュミコフは地下出版の必要性をゲルツェンに訴える。「もっと沢山書いて下さい。ただしヨーロッパのためにはなく、もっぱらわれわれのために。ヨーロッパはあなたを理解できない、今やヨーロッパは盲であり哑なのです！ロシア語で書いて下さい。たとえ気球を使ってでもあなたの著作を国内に普及する手段を見つけるよう努めて下さい……地下出版を是非組織せねばなりません。さもないとわれわれの昏睡は、長きにわたって続くでしょう」（JH. T. 62, стр. 718）と。そしてその手始めに『ゴゴリへの手紙』を提供したのである。またペテルブルクの新しい自由主義者のリストは、かつての念願だった自由ロシア出版所の設立と、それによる国内の革命運動との連繋が物理的、精神的に可能であるとの希望をゲルツェンに抱かせたにちがいない。その証拠に自由ロシア出版所設立に約一カ月前だつ1853年4月6日に、M. レイヘリに宛てて次のように書いている。「すべての課題は、人々を恒常的關係にひき入れる

ことです。ここでいう人々とは誰れか一私には分らない、多分ニースの私の元
へロシア語でエネルギーな匿名の手紙を寄こした青年や、その他ペトラシ
ェフスキー、スペシネフのような人々でしょう。……分って下さい、出版は行
動であり、事件なのです」(XXV, 45 傍点一筆者) こうして53年5月ロンドン
で自由ロシア出版は設立され、更に55年の『北極星』創刊号には、他でもない
チュミコフが提供した『ゴゴリへの手紙』が載り、国内で急激に普及するこ
とになるのである。⁽¹⁰⁾

「また何をなすべきか？」というチュミコフの問いに対し、ゲルツェンは「今
こそ亡命が有用である。しかし有能なロシア人は非常に少ない」として、チュ
ミコフにも亡命して自分の協力者となるよう促す(XXIV, 200) だがゲルツェ
ンとは身分の違う雑階級インテリゲンチア、チュミコフは、これをきっぱり断
わる。曰く「あなたは手紙(8月5日付ゲルツェン第二の手紙)の中で、ロシ
ア人の亡命は有用だと仰言る。だが富者のうちで政府に反抗する者は少ない。
他方貧者は外国で暮す手だてを持たない。それどころか優秀な人間は国内でこ
そはるかに有用なのです。世論を組織し、啓蒙せねばなりません。それにすで
に世論は活気を呈し始めているのです」(ЛН, т. 62, стр. 724) ここに至って
ゲルツェンと、チュミコフを代表とするヴヴェジエンスキー・サークルの人々
との間に、ロシアの現状認識、歴史観および革命運動の実践方法に関して大
きな隔りがあることが露頭する。そしてこの隔りの中にこそ、後のゲルツェン
とチェルヌィシェフスキーら若き世代との対立の兆しが垣間みられるのであ
る。

- (1) メドヴェージェフは、ロンドンのゲルツェンへ手紙を出したとしているが事実誤
認。Указ. статья, стр. 66.
- (2) 第三課と通じたバリ警察長官カルリエが、ゲルツェン宛の手紙をすべて検閲して
いたことをゲルツェンの手紙は語る(XXIV, 197)
- (3) チュミコフの手紙四通のうち第一のものは紛失、残りはブラハ・コレクションに
保存。1955年に初めて発表。ЛН, т. 62, стр. 716—725 ゲルツェンの手紙二通の
受信人がチュミコフであることはレムケが明かにした。
См. А. И. Герцен (XXIV. 459)
- (4) ゲルツェンは51年11月21日付ミンシュレーへの手紙で『ゴゴリへの手紙』が本物

- であることを請合う (XXIV, 393) が、実は外国人向に、多少手が増えられている。K. Богаевская, Письмо Белинского к Гоголю, ЛН, Т. 56, стр. 542—3
- (5) 自由主義者 Либерал という言葉は、60年代のチュエルヌインフェフスキー等の用語法と異なり、この時代には体制批判者という肯定的意味で用いられていることに注意。
- (6) チュミコフは、ゲルツェンの返事を待たずに『手紙』とその解説を独文誌《Das Ausland》に掲載している (ЛН. Т. 56, стр. 543) なおこの事実には今井義夫氏が若干言及している。『ロシア革命の研究』41頁第二章註, 中央公論社
- (7) 長縄光男, 『ゲルツェンと二月革命』, 『ロシア手帳』No. 5 参照
- (8) マリアは「二月革命に対するゲルツェンの反応は、当初から愛憎相半ばしていた」としてゲルツェンの複雑な心境を説明している。M. Malia, Alexander Herzen and the birth of Russian socialism, 1812—1855, Harvard Univ. Press, 1961, P. 369.
- (9) 確証はないが、手紙に出てくる「われわれ」「私の友人たち」という言葉は、チュミコフの交友関係から判断して「水曜会」に間違いはあるまい。また同じ手紙で、ペトラシェフスキー会の顛末を語り、逮捕を免れた会員の一人が、詳しいことを書くので後に転送するとある。これはミリュコフをさしてあり、彼は「水曜会」のメンバーでもあった。このことも上の判断の傍証となる。ЛН, т. 62, стр. 718—19.
- (10) スラヴ派の И. Акса́кофは、1856年にロシア国内を旅行した際、K. Акса́кофに次のように書いている。「ベリンスキーのゴゴリへの手紙を暗記していないような中学の教師、田舎教師は一人もいない、そして彼らの教えのもとで新しい世代が教育されている」と (1856年9月17日付) ЛН, т. 56, стр. 514.

第三章 ゲルツェンとの意見の相違

チュミコフの8月5日付の手紙には裏があったと前章で述べた。チュミコフは、フランスの現状について『向う岸から』のゲルツェンと同じ見解に立ったとし、しかもスラヴ派の思想をそれと同列におき、スラヴ派の思想の民衆性^{ナロードツスチ}を再評価すべきと述べる。だがこれはチュミコフが、ゲルツェンの中にスラヴ派への精神的回帰をみ、彼の歓心をかうために行った駈引なのだ。一方、国内の運動との絆を回復する最後の頼みを得たと思ったゲルツェンはそれに気づかない⁽¹⁾。8月9日付の手紙でゲルツェンは自分の論文《Omnia mea mecum porto》(われはわがすべてを自らとともに運ぶ)と《Lebewohl》(私の別れの挨拶。1849年へのエピローグの略)を読むようにすすめる。1855年の『向う岸か

ら』ロシア語版に入ることになるこれらの論文で、ゲルツェンはヨーロッパの「革命の人々は思想の自由と生活の自由を心の底から唱えながら、かかる自由とヨーロッパのカトリック的秩序とがまったく両立しないことを考えてもみなかった」として、ヨーロッパの秩序志向的性格を批判し、自己を救わんがために沈み行くフランスという船を見捨てたが、それはスラヴ派的な正教による魂の全一性の回復への希求ではなく、一般的概念や、集合名詞や旗印の犠牲になることのない個人の真の自由を求めたからなのだ、ということを示している。こうしてスラヴ派との一線を画した上で、『フランス、イタリアからの手紙』で展開した思想、すなわちフランスの民衆とイタリア、スペインの（もちろんその奥にゲルツェンが思い描くのはロシアの民衆である）を対比し、前者は「軍隊、山岳党が考えるような民主主義の軍隊ではなく、共産主義の軍隊であり」、革命はできても「社会主義、自由への準備はできていない」(XXIV, 199)のに対し、後者は分散し未組織であるが、より発達した個人への尊敬心を持った自律的民衆であるとの確信を述べる。次にロシアの民衆に話を移し、それが上で述べたような可能性を秘めているとはいえ、未来は人間自身が作るものであり、「われわれがわが僻遠の地で朽ち続けるかぎり、ロシアからは実際、未熟児が出てくるだろう」(XXIV, 200)と断ずる。だからこそロシアを愛するものは、反動の砦ロシアの正面しか知らぬヨーロッパに、自由な未来の民衆のロシアを知らしめると同時に、国内で押し殺された自由な言論を取戻さねばならない。だからこそ亡命が有用なのだ、とゲルツェンは説いた。

一方チュミコフは、前述のごとくこの亡命の誘いを断るのだが、それに先立つ8月9日の手紙で、「すべての点であなたに同意すると言ったら、私は自分の意見を持たない人間あるいは、厚顔無恥の追従者となってしまうおう」(ЛН, т. 62, стр. 720)と前置きし、ゲルツェンの近著『ロシアにおける革命思想の発達』(おそらくゲルツェンが極秘資料受渡の媒介者として指定したバリの出版者フランクのところまで手にしたのであろう)にいくつかの批判を加えていた。これは当時のロシアの新しい動きを知る上で、非常に重要だが詳述することは紙数が許さないのので、ここではプーシキンに関する個所にだけ言及するに

とどめる。ゲルツェンは、プーシキンは教養あるロシア人のすべてが愛読する真に国民的詩人であり、オネーギンのタイプはきわめて国民的タイプであるとしてその形象の典型性を高く評価し、プーシキンの死にはベテルブルク全市が泣いたと書く。⁽⁷⁾だがこれに対しチュミコフは、今ではプーシキンを読む者などおらず、彼はまったく歴史を知らない詩人で、オネーギンは革命性などまるでないネフスキー通の肥満漢だと決めつけ、葬儀には友人たちと申し合せて参列しなかったほどだ。「果してこれはあなたの意見なのか、それともあなたはわれわれの世代の人間ではないのか」(JIH, T. 62, ctp. 721) と迫る。60年代のピーサレフは、社会的効用の名においてプーシキンを否定したが、このチュミコフの言葉は、それを先取りした感がある。だがピーサレフも認めるように、60年代のプーシキン否定の萌芽が、ベリンスキーにすでにあったとすれば、⁽⁸⁾それは何ら不思議ではない。

話を元に戻そう。上で紹介した8月5日付ゲルツェンの手紙を受け取ったチュミコフは、そこにゲルツェンの思想における民族の特殊性の絶対視、ロシア国内の時代的要求への無知をみる。こうして8月12日の最後の手紙には、後に(1859年7月、『鐘』掲載の『職務上の叱責』において)「上役的調子」としてゲルツェンの怒りをかう不遜な調子が僅かながら顔をのぞかせる。チュミコフは言う。未来の民衆……というあなたの思想は分る。だが私はあなたの民族的対比の妙に迷わされていたようだ。「私のいつもの主義は、各民族に長所だけを見て、それによって短所を相殺し、民族性の根絶をめざすこと」なのだ。「鉄道と気球—これぞ未来に関する問の答えである。それがわれわれのためのものでないなどとは考えてみるだけでも痛ましいことだ。」と。(JIH, T. 62, ctp. 724-25) ロシアで生きるチュミコフたち革命的青年にとって、ヨーロッパの現状がどうであれ、第一の課題はロシアの近代化なのである。ここには『ゴーゴリへの手紙』に代表される晩年のベリンスキーの思想が色濃く反映されているといえる。そしてフランスの惨状は、将来への教訓として利用すればいいのだ。フランス人は偉大な才能を持っているにもかかわらず、経験という学校で学ぼうとしない、とチュミコフがいう時、だがロシアは先進国の経験に

学びつつ、しかも先進国がめざした理想は捨てることなくロシアの現状に則した方法で社会の変革を進めて行くという普遍的な歴史観が彼の根底にあるといえよう。60年代におけるチェルヌィシエフスキーとゲルツェンの共同体的社会主義の内的相違を根本において規定していたのも、こうした歴史観の相違であった。⁽⁹⁾

しかし、以上のような対立点があったとはいえ、やはり国外で言論の自由を享受し、ロシアの変革のために働くゲルツェンへの期待は大きなものがあったといわねばならないだろう。チュミコフは書く。「果してあなたがた亡命者は、わが国の熱烈な青年たちを助けることができないであろうか？（前の手紙と較べて何たる調子の変化か、！）……祖国全土に有益な書物の普及網を整え、最初はず一つのこと（われわれの頭は堅いのだ）すなわち農民解放を繰り返し訴えねばならない。ポーランド人の関心をひかねばならない—彼らは密輸者の手口を良く知っているから」（JH, T. 62, стр. 725）と。そしてロシアに向けて書く時は、必ず中産階級（雑階級の意）を相手にし、サロン仲間にししか通じないほのめかしは禁物、と注文をつける。しかも一般に亡命者は容易に祖国から疎外されるものだから、ニコライ・トゥルゲーネフ（チュミコフとは42年にパリで知り合っている）のように嘘を語ると、支点を失い大衆に理解されなくなる（там же）と暗に警告までしている。このチュミコフの言葉には、国内の革命運動を担うものは、すでに雑階級なのだという自信が満ち溢れている。ではその自信の根拠となる彼らの実践活動とは何だったのか、それを最後に簡単に述べておこう。

チュミコフは「世論を組織する」ために、亡命を断った。だが二重検閲と大学への弾圧の中でいかにして革命思想を公衆に伝達するのか？ ここで「水曜会」のメンバーが中学校の文学教師だったことを想起しよう。48年以降の反動は主に首都の大学に向けられ、中学校や地方大学にはさほど厳しい監視の眼は注がれなかつた。⁽¹⁰⁾ニコライ政府のこの盲点をついたのが「水曜会」である。しかも文学の授業には他の課目ほど厳しい指導要領が課されず、比較的自由に講義できた（チェルヌィシエフスキーのサラトフ中学での講義はその典型。53年

2月21日の日記参照。I, 418)。こうして多くの反政府的な有能な人材が48年から55年の7年間に、自由のない首都の大学を逃れ、地方の中学校へ入っていった。そしてこのことが、一つには60年代における雑階級インテリゲンチアの大量出現の原因となったのである。冒頭で引用したゲルツェンの言葉は実はこのことを意味していた。同じ論文でゲルツェンは、この現象を「教育の分散化」あるいは「教育の資格制限の引き下げ」と名づけ、これをもって「貴族的ロシアは背景に退き……代って別の力が登場し、疲弊した指導者、戦士は別の隊列にとって代られた」(XVII, 102)と書くのである。

- (1) ゲルツェンがチュミコフとの接触をいかに大事にしていたかは、母と息子の海難事故の直後の精神的衝撃の中で、ハウクに代筆させたミシュレーへの手紙(50年11月21日)(XXIV, 393)等から知ることができる。
- (2), (3), (4) ゲルツェン『向う岸から』外川継男訳。現代思潮社, 168, 177, 186ページ。
- (5) 長縄光男『イタリアのゲルツェン』、『思想』1973, No. 6 参照。
- (6) ここでゲルツェンが共産主義と社会主義を区別しているのは注目に値する。ゲルツェンにとって共産主義とは、「報復の社会主義であり、…それは社会制度の大きな不正をかくも深く感じつつも人間の個性を尊重することのかくも少ないフランス国民の精神に近しいものである」(V, 199)そしてそれは必然的に暴力的革命と中央集権的な制度を帰結するとゲルツェンは考える。一方社会主義とは個人の自由と社会性が何の強制もなく共存できる社会であり、コムミューンの的なものである。だが「共産主義を恐れることはない、それは避け難い、それは旧社会の真の絶滅と新しい社会の支配をもたらすものになるだろう」(XXIV, 199)とチュミコフに述べている。それほどまでの破壊がない限り、西欧を支配する没個性的なカトリック精神は一掃できないという意味に解すべきだろう。
- (7) ゲルツェン、『ロシアにおける革命思想の発達』、金子幸彦訳, 104~113ページ、岩波文庫。
- (8) Д. И. Писарев, Пушкин и Белинский, Собр. соч. в 4—х томах, Т. 3 стр. 365—6, またピーサレフのプーシキン否定がベリンスキーに端を発することはС. Конкинも指摘している。С. С. Конкин, Пушкин в критике Писарева, «Русская Литература» 1972 г., No. 4 стр. 63.
- (9) チェルヌィシエフスキー、『ローマ帝国滅亡の原因について』におけるゲルツェン批判参照。(VII, 661—7)
- (10) ゲルツェンは書いている。「首都の教授たちが執拗な監視、密告に時に絞めつけられたのに対し、地方大学、中学校、神学校、幼年学校その他では、授業は順調に進んだ」と。(XVII, 101)